

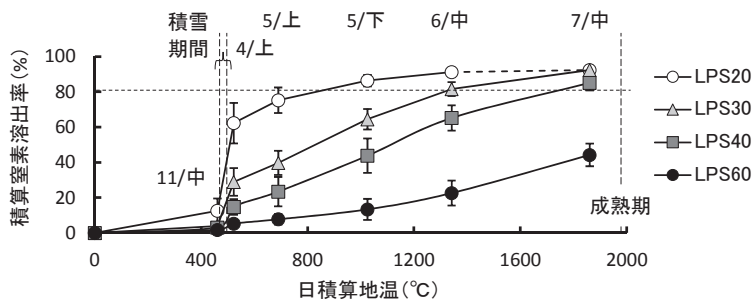


表1 基肥一発施肥法における肥料の組み合わせが収量・品質に及ぼす影響

施肥処理	平均								標準偏差			
	総重	粗	子実	HI	子実	千粒	窒素	窒素	子実	子実	窒素	窒素
	(kg/10a)	子実重	重 (左比)		タンパク	重	吸収量		重 (対照比)	タンパク (ポイント)	吸収量	
LPS30・14+2	1,887	944	920	100	50.1	10.4	43.6	20.0	72	5.0	0.45	0.9
LPS30・10+LPS40・4+2	1,868	937	916	99	50.2	10.4	43.9	19.5	76	4.5	0.45	1.0
LPS30・4+LPS40・10+2	1,900	944	924	100	49.8	10.8	43.9	20.6	86	3.2	0.36	1.5
LPS40・14+2	1,807	917	898	98	50.9	10.9	44.3	20.0	83	4.2	0.62	1.9
LPS20・6+LPS40・10	1,897	965	939	102	50.9	10.7	43.8	20.7	94	2.6	0.46	1.5
対照(4-8-0-4)	1,870	943	921	(100)	50.5	10.5	43.8	20.1	112	-	0.29	2.3

表2 基肥一発施肥法の現地実証

圃場	施肥処理	窒素施肥量 (kg/10a)					起生期	止葉期	収穫物収量・品質			
		基肥	追肥(硫安)	合計	茎数	窒素	子実	窒素	子実	窒素	子実	窒素
		起生	幼生	止葉								
A	基肥一発	18	-	-	-	18	242	6.8	417	84	9.3	8.5
	慣行	5	6	7	0	18	200	11.1	496 (100)	11.0	13.3	-
B	基肥一発	18	-	-	-	18	247	8.2	770	115	11.5	-
	慣行	6	4	4	4	18	230	6.4	667 (100)	11.4	-	-
C	基肥一発	18	-	-	-	18	548	13.2	759	97	12.1	19.5
	慣行	4	6	4	4	18	468	10.2	791 (100)	13.4	23.7	-
D	基肥一発	16	-	-	-	16	790	12.3	618	117	11.4	-
	慣行	5	4	0	4	15	750	8.8	530 (100)	11.1	-	-
E	基肥一発	17	-	-	-	17	770	8.5	754	98	10.0	15.2
	慣行	4	4	5	4	17	777	10.2	771 (100)	10.6	16.5	-
平均	基肥一発	17	-	-	-	17	519	9.8	663	102	10.8	-
	慣行	5	5	4	3	17	485	9.3	651 (100)	11.5	-	-

注1) 基肥一発区は
試作肥料 BB050CuLS (N20%)
を 80~90kg/10a 施用。肥料
の要素割合は表1「LPS30・4
+LPS40・10+2」と同じ。
注2) 播種日は A (山間部) :
9/29、
B : 9/26、C : 9/25、D : 9/26、
E : 9/21。
注3) 起生期は A : 4/14、
B : 4/5、C : 4/5、D : 不明、
E : 4/1。
注4) 止葉期は A : 6/6、
B : 5/22、C : 5/25、D : 5/31、
E : 5/26。

技術選択				【基肥一発施肥法】基本事項	
項目		窒素施肥法		●初期生育の確保に努める 適期・適量播種、出芽安定化	
		通常施肥法	基肥一発施肥法	【基肥一発施肥法】留意事項	
1	労力の軽減	小	大	●以下の条件では適用を控える	
	追肥回数	2~4回程度	0回	・土壌：泥炭土 ・気象：起生期が遅く低温で経過 (窒素供給の遅れに伴う生育の遅れ)	
2	収量・品質の安定性	高	やや低	・品種：「きたほなみ」以外 ※他品種への適用は事前に検討が必要	
	窒素追肥調整	生育・土壌診断対応	診断基準なし(未検証)	●有機物施用等による対応は現行基準に準拠する	
3	費用(コスト)の抑制	大	小	●起生期および止葉期の施肥対応は行わない (タンパク基準値超過)	
	費用増加(対通常施肥法)	-	0~1,300円/10a	500~2,500円/10a	

・導入は経営内の一部に限定(収量・品質変動に伴う経営安定性の低下を回避)

図2 秋まき小麦に対する窒素追肥省略技術の導入指針

注1) 起生期省略施肥法は、窒素量として基肥に硫安で2kg/10a、止葉期に追肥4kg/10a、総量からこれらを差し引いた量を基肥に肥効調節型肥料(被覆尿素肥料シグモイド型30日タイプ)で施用する追肥省略技術。
注2) 基肥一発施肥法に用いる専用肥料は近く市販化される予定であり、価格対策が進められると費用の差は抑えられると想定される。

詳しい内容については、次にお問い合わせ下さい。
道総研北見農業試験場
電話 (0157) 47-2146 E-mail : kitami-agri@hro.or.jp